

課題1 プログラムの問題

努力した割に学生が集まらない、集まったはいけれど脱落していく…。大学のグローバル人材を育てるプログラムがうまくいかない要因は？

ニーズに合っているか？ ストリーリーのある設計か？

「学生の意欲が低いから」は本当か？

社会でこれだけグローバル化が叫ばれていても、大学がせっかく用意した長期留学や特別な語学プログラムに学生が思ったほど手を上げず、枠が埋まらないという話をよく聞きます。「最近の若者は内向きだから」と、学生にその原因を求める向きも多いようです。しかし、本当にそうでしょうか？ 左ページのデータをご覧ください。大学入学前の高校生の語学や留学についての関心度は、決して低くはありません。つまり、グローバル教育に関心のある学生が入学しているにもかかわらず、その関心を生かすプログラムや設計になっていない

めに、思ったほど成果が上がらないのです。

学生のグローバル化を阻む3つの課題

① 学生のニーズやレベルに合ったものか
② 4年間の育成ストーリーに基づいた設計か
③ 学生への周知
まず①です。今の高校生のグローバル体験や語学力は2極化しています。高校生の中には、大学生顔負けのグローバル教育を受けている層が1割程度はいます。そうした学生にとっては、従来型の

プログラムでは物足りないものに映り、参加意欲がわきません。他方、残り9割の普通の学生にとっては、留学や語学講座に関心はあっても、敷居が高く見えます。大学が「A国に留学して英語と現地語を学ぼう」「TOEIC800点めざそう」などと打ち出すと、尻込みしてしまいます。

課外講座として語学トレーニングを行っている大学からよく聞くのが、「開講当初は人が集まるが、時間がたつにつれて減る」という声です。これは、学生のニーズと内容が異なることから起こるものです。学生は、図表2にあるように、「話す力」など、使える英語を身に付けたいと考えています。それに対し授業が座学でのリーディング、リスニング中心の課外のものだと、興味を失います。これは、正課の英語の授業にも言えることでしょう。レベルの問題もあります。多くの大学で実施している海外での短

期語学研修。レベル分けが大雑把なため、自分にフィットした授業が受けられなかったというケースも散見されます。それが悪い口コミとなり、翌年の募集で苦戦するところもあるようです。

打ち上げ花火で終わるプログラムではないか？

2つ目の課題として、「4年間の育成ストーリーに基づいた設計か」が挙げられます。たとえそのプログラム自体は素晴らしいものでも、他のカリキュラムと連動していない——例えば短期留学に行っても、その経験を生かす学びが帰国後の授業に用意されていないなど、4年間の育成ストーリーがない設計だと、一過性の経験で終わってしまう可能性が高いです。また、学生が続かないプログラムは、ともすると学生のせいにし



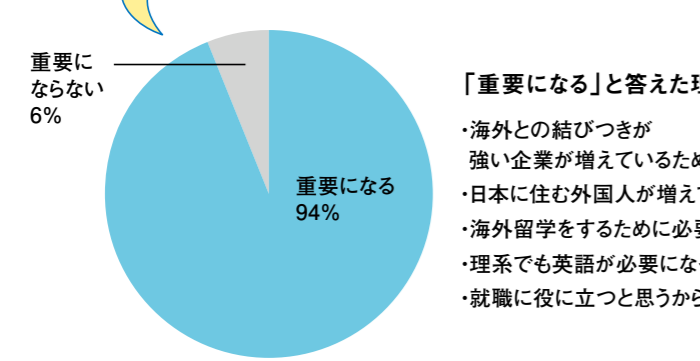
(株)進研アド グローバル企画室 室長 横山 俊介
よこやま じゅんすけ ● (株)ベネッセコーポレーション 高校事業部を経て現職。THE世界大学ランキング分析、留学促進施策研究、英語力向上プログラム開発など、大学のグローバル化を総合的に支援。

取材・文 / 見山雄介 撮影 / 御堂義典(横山俊介)、坂井公秋(P11の大学写真)

グローバル教育への 高校生 の関心度

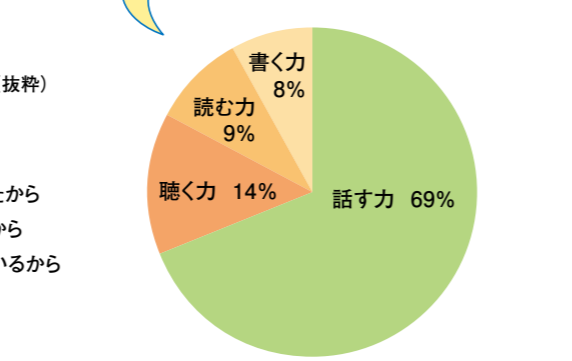
9割以上が英語力の重要性を認識 【図表1】

Q 今後、英語力を身に付けることが重要になると思うか？



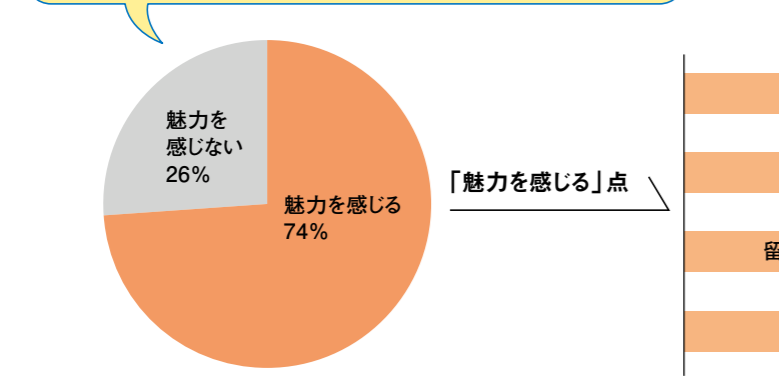
約7割が「話す」力を重視 【図表2】

Q 英語4技能のうち、最も伸ばしたい力は？



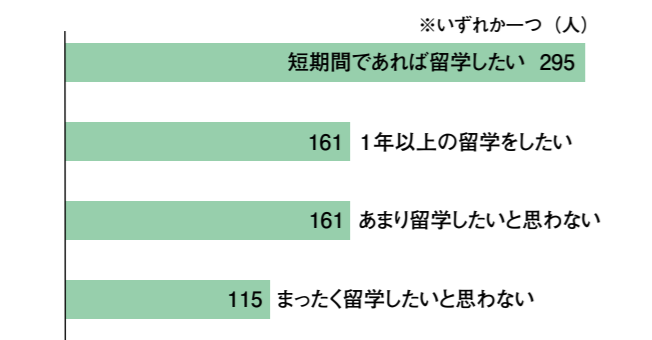
グローバル教育の充実度が大学の魅力に影響 【図表3】

Q グローバル教育に力を入れている大学に魅力を感じる？



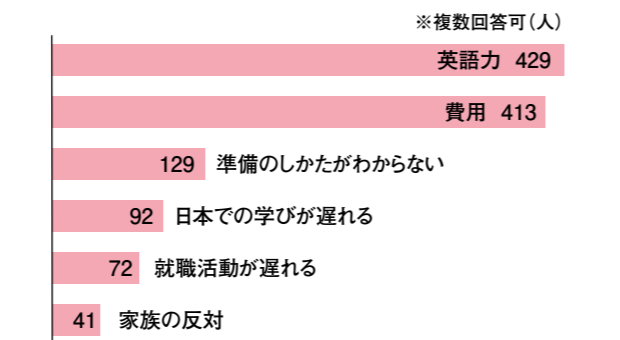
高校生の関心が最も高いのは短期留学 【図表4】

～大学在学中の留学についての意向

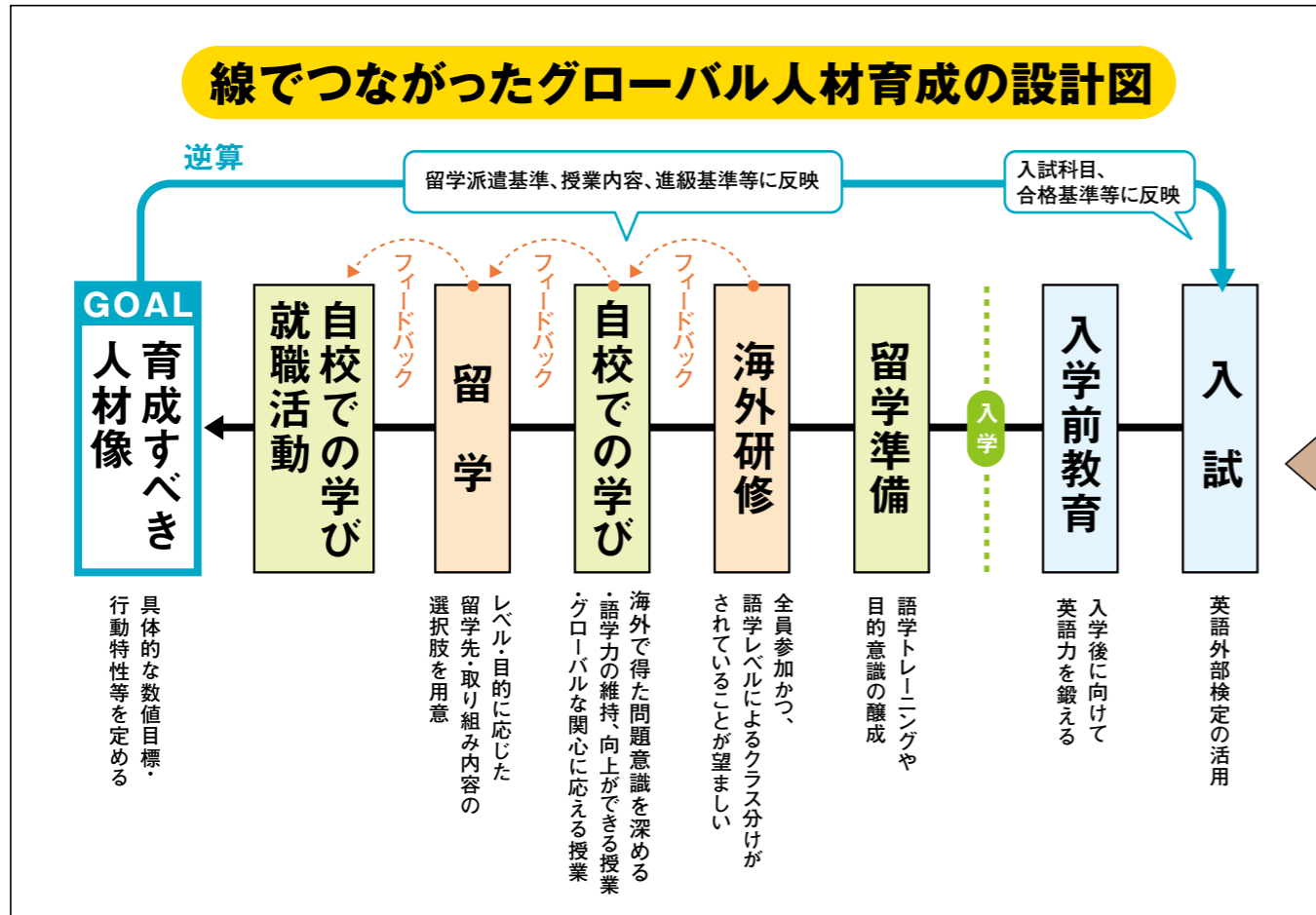


英語力や費用に関する不安が大きい 【図表5】

～大学在学中の留学についての不安



*進研アド調べ。大学進学相談会Benesse進学フェアに会場した高校生916人へのアンケート結果。



高校までにグローバル経験のない層にとって

敷居が高い

プログラムが「点」で他のカリキュラムと「線」でつながっていない

学生の自主性のみ

プログラム参加が

留学時期が遅い

問題のある取り組み例

入試でビジネス英語の力を測定

学生が続けにくい運用設計

DP→CP→APに基づいていない

語学レベルに応じたクラス分け、授業が用意されていない

で、DPやCPにはよくても、APには不向きです。入試においては多くの高校生が受験しやすい外部検定を選択できる設計が望ましいと言えます。

早期・強制的留学でモチベーション醸成

順調な大学によく見られる他の特徴は、海外体験を全員参加に行っていることです。実施時期が早期であることもポイントです。

短期でも一度海外を体験した学生は、「語学力が足りない」「次は別の国に行きたい」などの思いを抱きます。この思いに応える自校の学びと、目的に応じて選べる留学を用意するのが理想です。2度目の留学の際は、学生の意識や経験値は高まっています。呼びかけも届きやすく、プログラムを選ぶ目も持っています。1度目の海外体験が早期であれば、再び留学に行っても就職活動に間に合います。

多様な留学メニューを準備する負担は大きいですが、近年の留学エージェントの商品には、自校に合ったプログラムをアレンジしてくれるものや、他大学と共催することにより人数調整のリスクを減らすものがあります。活用を検討してみてください。

がちですが、実はその運用設計に無理があり、「続けたいけど続けにくい」場合が多いようです。「看板倒れ」に終わらないように、学生が現実的につけていける運用設計にすることが重要です。

周知徹底に悩むなら全員参加の方法も

課題③として私があげたのが、「学生への周知」問題です。これは長年の高校に携わる事業経験からの実感ですが、高校と大学の大きな違いは、教員と学生（生徒）との距離です。高校なら、何か生徒に勧めたいことがあるれば、生徒と毎日顔を合わせる担任が直接伝えたり、個別に声をかけて周知や参加を徹底させたりすることが可能です。しかし、大学はそれが難しい。ガイダンス、掲示板、WEBサイトなどさまざまな方法で告知しても、学生全員に周知徹底し、参加を促すことには限界があります。

その解決策としては、参加を学生の自主性に任せるのではなく、全員参加にするという手があります。希望者を募る手間が省けるだけでなく、学生全体の学びが高まり、学生募集上のようなアピール材料にもなるでしょう。

自校のプログラムを受けてみて…

松永朋子さん 神奈川県 経営学部 国際経営学科3年

言葉は文化の壁を超える手段

多民族国家マレーシアに1年間留学して、コミュニケーションの重要性に気づきました。帰国後は、ゼミ活動の一環として、観光地で「外国語を話せませう」と記したハッジをつけ、外国人旅行者の手助けをしています。

山田等仁さん 京都産業大学 総合生命科学部 生命資源環境学科3年

海外体験で生まれた積極性

「海外サイエンスキャンプ」で短期間ながらアメリカ生活を体験。不安だった英語は、懸命に話せば通じることがわかりました。また、現地で働く社会人との交流を通じて、社会に出てもやっていけると自信が付き、帰国後の大学生活で積極性が増しました。

小森輝さん 京都産業大学 理学部 物理科学科2年

語学への意欲が急上昇

1年次から「グローバルサイエンスコース」で英語によるグループワークを続けています。自分の英語のレベルを思い知り、在学中に何に力を入れて学ばべきかがわかったことが収穫でした。今は、語学力を上げるために英語の勉強会を開いています。

ゴールからの逆算で一貫性のある教育を

では、グローバル人材の育成が順調な大学のプログラムに見られる特徴は何でしょうか。一つは、育成すべき人材像や自校がめざすビジョンから逆算して、「点」ではなく、「線」でプログラムを組み立てていることです。

例えばある理系の大学は、大学院の授業を英語だけで行うことにし、留学生を招いて研究のグローバル化を図り、世界に存在感を示すというビジョンを定めました（DP）。そこから逆算して学部生の英語力を上げるため、4年次への進級基準にTOEICのスコアを導入し、これをクリアできる力を育てる語学学習システムや留学メニューをつくりました（CP）。入試では「極端に英語が苦手な学生を作らない」という方針を立て、英語外部検定試験のスコアを出願条件としました（AP）。

このようにゴールが明確で具体的にあれば、自ずとDPからAPまで一貫性のあるプログラムを構築できます。

ただしゴールに定めた目標を、安易に入試に当てはめるのは考えものです。例えばTOEICはビジネス英語の力を測る試験なの